

～夢・共同一致・癒やし～

クサティ森を核とした花と緑で包む散策コース

南城市津波古公民館

高江洲 順達

～夢・共同一致・癒やし～
クサティ森を核とした花と緑で包む散策コース

南城市津波古公民館
高江洲 順達

1. はじめに

(1) 津波古区の地域概要

津波古区は東経 127 度 46 分、北緯 26 度 10 分の位置にあり、沖縄本島南部、南城市の北部に位置する。

津波古は 15 世紀中頃に創立された「村」だと言われている。村の発生は、多和田子・松堂之子・外間子・喜屋武久子の四元（本所）が祖である。その場所は、多和田殿跡・外間殿跡・大松堂殿跡がある上津波古原や喜屋武久殿・安次富殿跡がある見謝原付いわゆる馬天小学校の西側方面の丘陵である。その地から戦前の津波古のゴバン型集落への移動は王府時代の 1700 年代の後半頃だと言われている。沖縄戦の直後は、津波古は米軍用地となり、帰郷することができなかった。そこで、現在の国道 331 号の東側を区画整理し、住宅地を求め、1951 年（昭 26）11 月 26 日に旧宅地の開放許可となり、戦前の元屋敷への移転が可能となり住宅地が拡大していく。

一方、戦後の津波古は一時「馬天区」と称し、馬天港には、終戦直後は本島内に物資を配給した民政府の中央倉庫、沈潜などの鉄くずを集める英国籍のサルベージ会社があり、スクラップの集積が産業となった。加えて大東島などの離島航路が戦前から馬天港にあったためスクラップブームと相まって働き口を求めて本島内だけでなく離島からも人が流入し 1950 年代には爆発的に人口が増える。くじら工場、製糖工場、琉球政府水産研究所、劇場、料亭、銭湯等の町的機能の施設も見られ本島南部でも指折りの賑わいをみせる。同区は南城市においても公共交通の利便が最もよく、1982 年唯一の公共施設、馬天小学校の開校、2012 年の仲瀬毛の区画整理事業以降、病院やスーパー、アパートなどができて第 2 次の人口流入が続く。

戦前の農業を中心とする旧来型の集落から戦後はスクラップブームで外からの就業構造が変化し、現在、公共交通の利便性から閑静な住宅地へ変遷している。



(2) 津波古区の人口の推移

津波古の人口は、明治の初期（1880年）に887人であったが、明治の後半1903年に1006人、そのとき、92.5%は平民で、士族が7.5%であった。昭和のはじめ頃1931年に1577人に達し、スクラップブーム時の1954年は2149人と第1次の人口流入となる。公共交通の利便性から2010年に3053人と漸次増加し、2012年の仲瀬原の区画整理事業はそれに拍車をかけ、第2次の人口流入となり2019年1月末現在、3712人となっている。令和3年（2021年）9月末日の津波古区の人口・世帯数は、3,835人・1,649世帯となっており、南城市内において突出して人口の多い区となっている。平成18年12月から比較し、783人増・653世帯増と人口・世帯ともに増加している。馬天シータウン等の新しく開発されている住宅エリアにおける居住人口の増加等が要因と考えられる。

2. 環境大臣賞を受賞して腰当森（クサティムイ）に植樹

(1) 環境大臣賞受賞

令和2年2月21日環境省主催の第14回「みどり香るまちづくり」企画コンテストにおいて津波古自治会と花咲かす会が共同で応募した『人の和を香りで包む腰当森（クサティムイ）～つなぐ場づくりで、つながる～』が環境大臣賞を受賞した。全国から16件の応募があり、同企画は「地域社会にとって重要な公共空間を、地域の個性を増強するかのよう香る植物の植栽によって公共性を高めていくことは良い企画」と選者から高い評価を得て50万円分の苗木の副賞付の環境大臣賞に輝いた。植樹は区民が共同一致して令和2年4月29日と5月2日に分割して行われた。コロナ禍の終焉の見通しがつかず、しかも梅雨時期前に実施しなければ香る木の活着に影響を与えることを考慮しての苦肉の策。今後区民の知の活用を図りながら、香る植物を通じた社会教育や環境教育等を行える場、癒やしや学びを得られる拠点とする。区民の精神的拠り所である土帝君（お宮）を香る花、香る木で一杯にして、日常的に区民が憩える場をつくる機運が高まった。

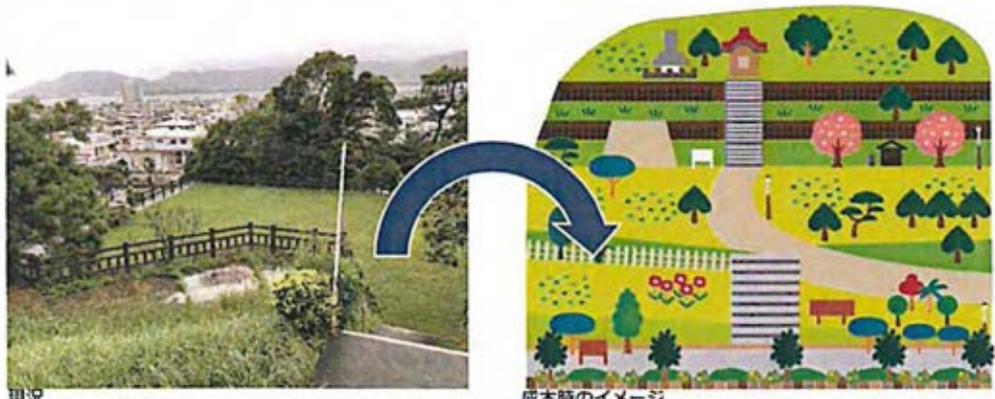
環境大臣賞

人の和を香りで包む腰当森（鎮守の森）
～つなぐ場づくりで、つながる～

企画者：津波古自治会/つはこ花さかす会
場所：沖縄県南城市

概要

集落の祭祀の場である土帝君や慰霊の塔が在する児童公園を中心に、オープンガーデン等の既存のイベントと連携した植栽イベントを行い、集落内外のつながりを築いて和を広げ、癒やしや学びを得られる拠点とする。加えて、学公民館施設の機能や地元住民の持つ知の活用により、香り植物を通じた社会教育や環境教育、文化振興・交流を継続的に行える場とする。また、植栽プレートにQRコードを付し、学びの入り口となる環境もつくる。



現況

腰当森のイメージ

(2) 腰当森（クサティムイ）に花木を植樹



4月29日区民がスコップ、ヘラで穴を掘り「香る花、香る木を」を植えて記念写真を撮った。

(3) 区民の憩いの場を目指して樹名板設置（現況）

サガリバナ、相思樹（ソウシジュ）、テンニンカ（天人花）、シラン（紫蘭）、アラマンダ、メイフラワー（フブキバナ）、ナスタチウム（キンレンカ）、シャリンバイ（車輪梅）ホウライカガミ（蓬莱鏡）等の樹名板を設置し、教育環境を整えた。県蝶のオオゴマラが現われた。整備途上だが多くの県民が訪れるようにオープンガーデンに参画する予定。



(4) 南城市のオープンガーデンに津波古から2団体が参画

南城市で毎年春(4月)と秋(10月)に開催される「憩いのオープンガーデン」。オープンガーデンとは南城市内の個人宅などのお庭を期間限定で一般開放して、ガーデンに植えられた花や植木を鑑賞できるシステム。入場は午前 10 時から午後 5 時まで。パスポートセット(税込み 500 円、高校生以下無料)が必要。南城市地域物産館など市内外 15 カ所で購入できる。津波古区から趣味を生かして地域づくりをする2団体、山学校と山の会が参画している。



山学校



山の会

(5) 土帝君「クサティ森」を整備する「つはこロマンの会」が誕生

令和2年8月22日に津波古区民の精神的拠り所(クサティ森)である土帝君を月に1回清掃ボランティアを行い、ノミニケーションのもと夢を語る会の結成総会が1時間作業した後開催され、会の名称が「つはこロマンの会」、活動日が「毎月第2土曜日」と決まった。結成総会には9人が集まり、末永く継続できる知恵をお互いが述べて、結局1時間程度作業を楽しむスタンスを確認した。



県道137号を起点とする水兼農道沿いに800M、5ヶ年間かけて100本の癒やしを感じる並木植林事業を展開する。津波古区に前述した南城市の憩いのオープンガーデンに参画している山の会、山学校がある。いずれも水兼農道沿いに立地している。将来的に土帝君がオープンガーデンに参画する。その土帝君を核として、山学校、山の会を結び水兼農道に往来人を魅了する樹木を5年計画で100本植える。1年目はヒカンザクラを公益社団法人沖縄県緑化推進委員会及び土地所有者の協力を得て20本植えることが決まった。

●水兼農道の現況写真

この水兼農道に種々雑多な花と緑で包まれた並木道が出来たらと夢が膨らむ。

県道137号①を起点に②③④山の会⑤⑥⑦⑧山学校と大里城址公園方面に伸びる。





4. まとめ

津波古区民の精神的拠り所であるクサティ森を核とし、水兼農道沿いに、花と緑で包む並木道植樹事業は、今、構想段階から一歩足を踏ふみだすことができた。津波古区の旗頭にある共同一致の精神であたれば、夢は実現し、区民に癒やしを与える散策コースは実現できると確信する。その推進役を担うのが「つはこロマンの会」である。



ヌーバレー会場には共同一致の旗頭が威風堂々と屹立する